

巻頭言

降りてゆくコミュニティケア

北海道医療福祉大学教授、浦河べてるの家理事 向谷地 生良

昨年の夏に公開された武田鉄矢さん主演の映画「降りてゆく生き方」は、映画を見た後、参加者が共に語り合い、交流するというムービーパーティー方式を取り入れながら自主上映の輪が全国各地に広がっている。一昨年の春から新潟を舞台に撮影がはじまったこの映画は、何から何まで異例づくめである。それは、1,731人の市民がオーディションにのぞみ、市民参加の映画になったことばかりではなく、“通”の方はすでに気づかれたかもしれないが、1978年から現在まで、北海道日高にある浦河町という過疎地域を拠点に精神障害をかかえる若者有志と共にさまざまな活動を展開してきたべてるの家の理念が、そのまま映画の題名になっていることである。

26年前、町の一角にある小さな教会の一室を借りてはじまった日高昆布の下請け作業がべてるの家を生み出し、そこから生まれた多くの活動理念の一つが「降りてゆく生き方」であった。

映画の撮影には、浦河からメンバー共々べてるの家の昇り旗を持って駆け付け、そ

の勢いで、“出演”までしてしまうという予想外の展開になった。ストーリーは見てのお楽しみということになるが、一流投資会社の社員である武田鉄矢さん演じる川本五十六が集落を丸ごと買収し、再開発をするというところからはじまるが、その集落で無農薬、無肥料の農業を営む自然農法家を演じる荻谷俊介さんが、川本五十六に、「もしかしたら、今日死ぬかもしれないということを意識しながら生きることが大切だ」と語る場面がある。

それと似たような話を、昨年の秋にお会いした生活リハビリ研究所の三好春樹さんから伺った。その際、三好さんは、今、インドにハマっているという話題の中で、「インドの人はね。人間は死ぬということを知って暮らしてるんですよ」と教えてくれた。私は、その話が妙に心に残った。もちろん、「人間は死ぬ」ということを知らない日本人はいないはずである。私が知っているはずの「死ぬ」ということが、私たちの生活実感の中から遠ざかり、むしろ喪失している状況の中であって、何かありがち

な悲壮感を越えて、懐かしい趣をもった事
がらとして三好さんが語られていたことが
印象的であった。

実は、映画のタイトルにもなり、べてる
の家の理念として親しまれてきた「降りて
ゆく生き方」は、私が学生時代に読んだア
メリカの思想家であり神学者であったパウ
ル・ティリッヒの「存在への勇氣」(新教出
版)に触発され私自身、大切にしてきた言
葉である。その著作の中でティリッヒは、
人の人生を「毎日、毎日、私たちは死んで
いる。現実の死とは、一日、一日、死んで
いる“死への連鎖”が途切れることを意味す
る」という趣旨のことを書いている。

「私たちは、生きていたのではなく、毎
日死んでいる」というこの言葉は、私の人
生観を一変させた。学生時代、生活費を稼
ぐために、特別養護老人ホームで住み込み
の夜間介護人をしていた私は、夜間、亡く
なったお年寄りを霊安室に運ぶ仕事も任さ
れていた。日中、親しくしていただいたお
年寄りが、亡くなるということは、二十歳
前後の私にとっては辛い出来事であった。
それは、そこで「人間はいつしか死ぬ」と
いう知識としての死を越えて、「私もいつ
かは死ぬ」という深い自意識をともなった
死生観を身につけることになる。

「毎日死んでいる」という自意識こそ、
私は降りてゆく生き方の根本に流れる深い
人生観だと思っている。近代化は、「死ぬ」

という人間の悠久の営みを、いつのまにか
「アクシデント」と捉えるようになり、そ
の克服を支えたのが医学をはじめとする科
学技術の進歩であった。そして、「死」は、
私たち自身から隠され、生活実感の中から
も遠ざけられる中で、「認知症予防」や「ア
ンチエイジング」という言葉に象徴される
ように、さらにそれを回避することが国家
的なテーマとしてキャンペーンが張られて
いる。

そういう中で、北海道浦河町にある「べ
てるの家」の活動に根差した死生観は「安
心してボケられる地域づくり」であり、「治
りませんように」という希望である。べて
るの家がいちばん大切にしてきたセレモ
ニーは、お葬式である。仲間の死を隠し立
てすることなく分かち合うことを通じて、
生きづらさを抱えた人たちが、生きられる
ようになるという場面を多く体験してきた。

「死ぬって人を生かすんだね」。これはあ
るメンバーの語った言葉である。死ぬとい
うことが、生きることの無意味さを予感さ
せるのではなく、むしろ、生きることの可
可能性を示す出来事として、地域の中で受け
継ぐためには何が必要なのだろうか。それ
は、「死ぬこと」の復権と、再生に向けて
課せられたコミュニティケアの大きな課題
であり、「降りてゆくケア」という大切な
テーマであるような気がしている。